

# 現代の名工と技能伝承に思う

兵庫センター  
(兵庫職業能力開発促進センター)

頃末 寛

## 1. 教える者と教わる者との心構え

卓越した技能者を多く生みだした団塊の世代が定年を迎えようとしている。彼らの多くは15歳または18歳で会社に入り、労働環境の悪い職場で気難しい職人氣質の先輩たちからの厳しい叱責を日々身体で受け止めて、そして悩み苦しき何度かの挫折を繰り返した後、その分野で生き残った数名が現代の名工という称号を手にする事ができたのだろう。

ところで、現在社会的な問題になりつつある技能離れした若者たちへ、この名人たちは技能伝承をどのような理念をもって行うのだろうかと考え込んでしまった。

技能は有るレベルまでは簡単にだれにでも到達できるが、その神髄とか奥義といわれる領域に達するには多分に精神的な世界が存在するものらしい。一例をあげるならば、技能五輪強化訓練には座禅修養が必須であるし、あるいは滝に打たれて精神統一をする者もいると聞く。そんな精神世界に近い技能とは、まさに神業ともいえるだろう。それ故に、この域に到達した現代の名工たちには、頑固で妥協を許さぬ一徹な面がその切り口によってはみえたりもするのであるが、よく観察するとそこには人格から醸し出す風格も宿っていて、ふっと匂うような一種爽やかなものが身辺に漂っているものである。そのような人格に仕上がるには持って生まれたその人の資質が「技能土壌」に芽吹き、さらにはモノづくりの面白さという触媒が作用して、磨きがかかり、時間

を経てブランディーのように発酵して蒸留したのだろう。そこまで行きつくには他人には言われぬ苦勞があったに違いない。

彼らの修業時代には昔気質の職人たちから暴力を振るわれたり、人間の尊厳を傷つけられるような罵声を浴びながらも家に逃げ帰ることもできなく、歯を食いしばって技能習得に励み、早く一人前になる事を願い、辛抱と努力を重ねて職場での地位を築きあげたに違いない。その揺るぎない技能を身に付けた裏付けがあるから、自信をもってモノづくりの職場に君臨することができたのだろう。彼らの多くは「あの上野駅」の青春応援歌に代表される集団就職列車の経験者であり、戦後の家庭は皆一様に貧しく、口減らしのために家族の犠牲になった長男たちが多い。薄暗い30wの裸電球は貧しさの象徴ともいえるその茶の間で、父親から「一人前に成るまでは帰省するな!」とも言われたであろう。そんな気持ちを背負って少ない給料の中から父親的代行業の役目もあってか、田舎の家族に送金もしていた。世間から見れば誠に人生の鑑のような青春を送ってきたし、そのことが行動における精神的な指針であり、それが血や骨となつて生き抜いてきただけに、今の若者がどうしても不がいなく見えてしまうのであろう。それほどにおのおのの技能習得は苦しくて重く辛い修業の上に成立していることを体験しているから、今の若者に自分の修業時代を強要するのはどうにも酷であり、若者たちにもそれがなんとなくわかるが故に、技能伝承の困難さがあるのだろう。

しかしながら、人間はどの分野でもなにかの

苦勞をする場面が必要で、それが自分自身の肥やしになってキラリと光る存在に成長していくもので、その過程はだれもが避けて通ることができない道であり、期間でもある。その技能習得は只単にマニュアルを読んでわからないところはインターネットで調べれば何とかできるというのではなく、人間が人間の心に触れて体温とともに伝わって体得できるものと確信する。そのためには嫌でも熟練技能者と若者は対面することが必要である。それは相手を尊敬する心構え、つまり人間関係から始まるものだといえよう。教えを乞う若者の方は師事する熟練技能者を尊敬することによって師の身体のかなし方、息づかいなどを注意深く観察する姿勢をとることになるだろう。全身の細胞を緊張させれば体中の毛穴まで

もが活動し、その人の人格や生き立ち、その考え方や家庭の臭いまでも、すべてを吸い取ることができる。その熱意は教えたくて堪らないという名人たちの琴線に触れ、学ぶ気持ちや態度は必然的に教える側にも伝わるものである。熟練技能者のほうにも人間の尊厳を傷つけられた昔の徒弟制度的なことを忘れて、学ぼうとする若者の熱意に対しては誠意で応えることができるのである。

昔の乱暴な教え方では、俗に言う嫁姑の関係のようにこじれるだけで、現代の技能伝承にマッチしないことを熟練技能者は百も承知なのであるから、お互いに姿勢を正して向かい合うことからその一歩が始まるのだろう。



# 日本の技術者

—江戸・明治時代—

中山秀太郎 著

技術史教育学会 編

■A 5判/208ページ

■定価1,575円(税込)

ISBN4-87563-224-X

好評発売中

江戸時代から明治・大正時代にかけて日本の近代化を推進するために多大な貢献をした28人の技術者の生涯を通して、技術と社会との関わり、技術の果たした役割や意義を説く。

■登場する28人の技術者

竹田近江/平賀源内/細川半蔵頼直/林 子平/伊能忠敬/  
飯塚伊賀七/橋本宗吉/間宮林蔵/帆足万里/シーボルト/  
高島秋帆/田中久重/江川坦庵/大野弁吉/高野長英/島津  
斉彬/佐久間象山/本木昌造/石河正龍/大島高任/宇都宮  
三郎/臥雲辰致/野呂景義/井口在屋/豊田佐吉/大隈栄一  
/小平浪平/大河内正敏

■発行所

社団法人 雇用問題研究会 <http://www.koyoerc.or.jp>

〒104-0033 東京都中央区新川1-16-14 電話 03-3523-5181 (代表) FAX 03-3523-5187